

総 括

イタサカ ノリコ
板坂 則子

国際日本文学研究集会は今年度、40回目の記念すべき回を迎えました。この喜ばしい会を委員長として総括させていただきます。

本会が始まってからの40年間の日本の動きを振り返りますと、高度成長期の中で大学教育の普及と共に教養として文学が持て囃される時代を経て、情報機器の発達によりインターネットを通してサブカルチャーを中心とした大衆性の強い若者の文化が世界に発信され、それと並行してそれまでのメインカルチャーとしての書物文化の衰退が見られ、経済的にはバブル崩壊後の停滞期を潜り、五年前の東日本大震災を筆頭に各地に自然災害も多発し、不安定な状況の中にいるように思われます。日本のみならず世界の各地で、それまでは予測もできなかった激しい政治的、経済的、思想的な変移の大波に直面しています。民族や宗教を越えた融和と普遍的な人間の尊厳を守ろうとする高邁な精神性がともすれば見失われ、視点を内側に向けた保護主義的な風潮が世界の動きをリードする国々でもあからさまに見られ、殊にこの2016年は、顕著な事象が顕れた時代の転換点として記憶されることでしょう。その中で、本邦では実学と直接に結びつかない人文社会系の学問が居場所を狭められつつあり、日本文学研究を巡る環境も険しさを増しています。日本文学の普遍的な価値とは何なのか、そしてそれは社会にどのように益するのか、そのような疑義が呈せられる社会状況の中で行われた本会は、まさにその答を導くような会となったと考えます。

本会では、40回の記念大会として、去年までのシンポジウム形式を離れて、国文学研究資料館長今西祐一郎氏の司会により、第4回と第12回の集会で研究発表を行われたKRISTEVA Tzvetana氏と兪玉姫氏のお二人方による特別講演が行われました。韓国・啓明大学校の兪玉姫氏の「俳諧に現れた日常の美学とその特性——日韓の詩歌比較の観点から——」は、日常の一コマを描くさまざまな近世の俳諧の解説から、移り変わりを称揚する日本人の感性と不変を讃える韓国と比較して論じ、韓国の遠心的、批判意識を明確に表す詩文と、日本の求心的で批判意識を表さない特性を論じ、切り口の鮮やかさに驚かされるものでした。又、国際基督教大学のKRISTEVA Tzvetana氏による「知の形態としての日本古典文学」は、タゴールとレヴィ=ストロースの言葉の紹介に始まり、ツベタナ氏のこれまでの生き方や「とりかえばや」や和歌といった研究対象との出会いなどを語られ、日本古典の和歌を例に、そこに表出された言語が作り上げる感性が、時には相反する意味を同時に表すという和歌の手法を用いて、豊潤な言語表現の世界を繰り広げていることを、聞く者の心に響く言の葉で強く語られました。古典は哲学や物理学の理論と結びつき、人間の精神を明確に表す手段を持ち、それによって豊饒かつ永遠の力を持つことが力強く主張されたのですが、お二方の講演者によって示された文学の力こそ、この会のもっとも基盤とする信念であり、40回記念大会にふさわしいものであったと思います。

土曜・日曜と行われた研究発表では、平安期の能因法師から昭和期の川端康成に及ぶ8名の発表が行われました。第1日目の第1セッションでの白雲飛氏の「『破鏡』は『半鏡』に非ず——源光行『百詠和歌』第一「分暉度鵲鏡」注を中心として——」は、しばしば同義語とされる破鏡と半鏡を源光行『百詠和歌』の注や『太平御覧』孟康注など日中の文献を用いてその違いを検証したもので手堅い研究成果が発表されました。巖教欽氏の「能因における貫之の影響——伝統と変奏——」は能因における貫之詠歌の取込とそこからの新たな詠法を具体的に提示して和歌の伝統を重んじる正統派歌人としての姿勢と「すきもの」としての変奏の姿を捉えたもの。上阪彩香氏の「西鶴浮世草子における物語の

内容別にみた文章の特徴について——数量的観点からみた好色物、武家物、町人物、雑話物の文章の違い——は数量的分析から西鶴の浮世草子の好色物等の分類間の特徴を探ろうとするもので、新しい手法として注目されますが、名詞、動詞、形容詞の分析からは、4個の内容的分類の特徴が出るもの予想される範囲内に留まることが多く、より精密な分析からの西鶴の特徴のあぶり出しが待たれます。第2セッションに移りますと、田云明氏の「中日僧伝文学に表れた「狂僧」に関する一考察」では、中国古典で「狂」「佯狂」と書かれる人物像を取り上げ、それが高僧伝の「狂僧」という人物像にどのように繋がるかが論じられました。「狂」という言葉は日中の文学に大きな影響を与えた重要なキーワードであり、「狂僧」の在り方についてより深い研究を期待したいと思います。趙季玉氏「中日文学交流における「夢記」——明恵『夢記』の執筆契機をめぐって——」は、明恵上人が約四十年に渡って記した自らが見た夢の記録である『夢記』と陶弘景『夢記』等との対比から、明恵『夢記』が中国の「夢記」に触発された可能性を示されましたが、明恵がこれらの作を見たという確証はなく、より具体的な例証が求められます。日本古典が中国古典から多大な影響を得ていることは言を俟たないところであり、本会でも多く見られた中国の研究者による日中の比較文学的手法は、日本人の研究者の及ばない文献を用いその心性に逼れるという利点から大いに期待されますが、その為には希望的観測に基づく見通しを避けた日中双方の既存の論文や文献への幅広い知識に基づいた実証性が求められるように思います。

2日目の第3セッションでは、何美娜氏「子規漢詩に見る女性観」は、取り上げられることの少ない子規の漢詩を材料にその女性観を探る試みで、楽しい発表でしたが、やや恣意的な読みの傾向も見られ、客観性をどのように出すかが今後の課題となるでしょう。森下涼子氏「『山の音』における能——諸外国語の翻訳から検討する——」は、川端康成『山の音』中の能に関する場面のエドワード・G・サイデンステッカーによる翻訳の比較から表現上の工夫を分析し、「日本らしさ」を読み解く試みですが、二つの言語の特性をくっきりと浮かび上

がらせており、本会ならではの発表となっていたように思います。フォッラコ・ガラ マリア氏の「永井荷風が描いたサウンドスケープ——昭和初期の作品における音の図象性——」は、荷風作品に描かれた都市空間におけるラジオや電車、鐘の音などの音をサウンドスケープ研究の手法によって読み解くもので、既に見られる音に着目した荷風研究の変容として興味深いものでした。

ショートセッションでは、『日本霊異記』中巻第十縁の脚色と改変を扱った孫世偉氏、志賀直哉文学を「リズム」概念から捉えた ZABEREZHNAIA Olga 氏、明治期の日本語教材として翻訳された講談速記本を分析した ALBEKER András Zsigmond 氏、多和田葉子の震災後に出された『献灯使』を論じた金昇淵氏、女同士の友情と恋愛を唯川恵作品を用いて提唱した SANGA Luciana 氏の五名の発表があり、さまざまな分野の文学の特性が論じられました。その他、ポスターセッションでは、去年に続いて平安期の薫き物を扱った田中圭子氏は菊香、梅香の香りを二日間に亘って会場に漂わせ、佐久間象山に「芸術」という言葉を追求した江崎公子氏は、「芸術」という言葉に籠めた長年の思いを語られ、国宝「銅造薬師如来坐像」の後背銘を画像によって丁寧提示した頼衍宏氏など7名の研究者により、幅広い分野から興味深い研究内容が解説されました。

このように研究発表では、ショートセッションを含めて80%以上の発表が海外の主に若手の研究者によって行われ、多様な時代とジャンルの日本文学研究の成果が発表され、まさに「国際日本文学研究集会」にふさわしく、喜ばしいことであると考えます。反面、発表者のほとんどは現在、日本在住で研究を続けておられ、そこからは、海外から本会への参加に掛かる費用的、時間的な制約を感じずにはおられません。日本での日本文学研究は日本的な研究方法たとえば文献学的な手法によるものも多く、発表に至る迄の真摯な攻究の姿勢に敬意を表したいと思います。反面、日本で長らく行われてきた伝統的な手法を破る大胆な論も大いに期待したいところです。資料を渉猟し限られた時間と制約された研究環境の中で精緻な研究を行うことの困難さを思いますが、研究対象のみならず、その周辺の研究への幅広く行き届いた目配りも望みたいと思いま

す。

今回の研究集会では、インターネットを通じてライブ配信が行われました。YouTube を用いた配信は画像も音声もクリアでしたが、ライブのみの為、時差のある海外では会場の様子を見られない人も多く、国によっては映像を送ることができない場合もあります。国際化は同時にIT機器の利用が不可欠です。今後、海外に向けてのより効果的な情報発信の方法を求めることが本会でも必要であると考えます。条件を整えば、インターネットを用いた海外からの研究発表等も考慮されるべきでしょう。同時に、発表者にも又、より効果的なIT技術の利用をプレゼンテーションの中で求めたいと思います。研究内容をどう発表するか、パワーポイントはホワイトボードの代わりではなく、どうすれば自らの研究成果を最も効果的に伝えられるか、更なる工夫を凝らしていただきたいと望みます。

なお、国際日本文学研究集会は来年度も今年度同様に11月開催を予定しております。皆様の御協力を御願いし、今後もより盛大な会となることを心から願っております。